

2006.09.29 bA

厚生労働科学研究費補助金
がん臨床研究事業

がん患者の心のケア及び医療相談のあり方に関する研究

平成17年度 総括・分担研究報告書

主任研究者 山口 建

平成18（2006）年4月

緩和医療対象者における患者・家族の心のケアに関する研究

分担研究者 木村 秀幸 岡山済生会総合病院副院長・ホスピス長

研究要旨：がん治療後再発し、終末期にある患者・家族の苦痛をやわらげるためには、終末期における状態の説明のしかたが重要な要素となる。スタッフが自分自身の性格のタイプを自覚した上で、患者・家族の性格のタイプに合わせた、納得しやすい説明のしかたと支援技術の確立と、その普及方法の確立が課題であることが明らかになった。

A. 研究目的

がんの治療後再発し、最終的に死に至る患者に対する緩和ケアは、最近かなり行われるようになってきた。しかし、その家族が抱える様々な問題に対しては、まだ充分とはいえない。本研究では、主に終末期にあるがん患者の家族のケアに焦点を当てて、調査を行い、支援方法の開発・確立を目的とする。

この研究により、末期状態にある患者とその家族が残された大切な時を平穏に過ごすことができ、患者の死後も家族の心の平安につながることを期待される。

B. 研究方法

末期状態にある患者と家族の苦痛をやわらげるため、終末期における状況の説明方法やケア方法の的確性を、緩和ケア病棟並びに一般病棟に入院中のがん患者と家族並びにスタッフを対象として調査を行った。

(倫理面の配慮)

患者・家族へのインフォームドコンセントを得て行った。

C. 研究結果

終末期にある患者・家族の苦痛をやわらげるためのスタッフによる説明のしかたや接し方により、安心感・満足度に違いがあることがわかった。

エニアグラムのタイプ 2 (heart center) のスタッフがタイプ 5 (head center) の患者さんに痛み止めを持っていった後、自分が気になるので 15 分毎に訪室し尋ねたところ、3 回目に「ただ来て尋ねるだけならもう来るな」と言われて、スタッフが気持ちのやり場をなくした。また、このタイプ 2 (このタイプは人の役に立つということ、頑張れる) の患者さんがスタッフに対して、昔旅行して印象の良かった旅館を教えることで心の満足感を得た。

患者さんとスタッフ、それぞれのタイプに合わせて説明・ケアをすることの重要性が明らかになった。

D. 考察

終末期にある患者の状態を患者と家族に説明し、ケアする際、どのように説明し、ケアしていくかは重要なことである。患者・家族の性格 (エニアグラムのタイプ) により受け取り方が異なっており、しかも、それにスタッフのタイプによる相互関係も出てくる。人は、他人も自分と同じように考える(思う)ものだと考えがちであるが、人は異なる立場や考え方を持っているということ認識することの重要性が示唆された。今回使用したエニアグラムのタイプチェック表からだけでは、タイプの適中率は 6~7 割である。今後は、より精度の高いタイプチェック方法とそれに準拠した支援技術の確立が望まれる。

E. 結論

終末期にある患者の状態を患者・家族にわかり易く説明し、満足してもらうために、患者・家族並びにスタッフの性格 (エニアグラムのタイプ) を考慮することが大切であり、その啓蒙・普及の重要性が明らかになった。

F. 健康危険情報

特記すべきことなし

G. 研究発表

1. 論文発表

○木村秀幸：大腸・直腸がん術後の患者ケア. 治療. 87 : 1498-1502, 2005

H. 知的財産権の出現・登録状況 (予定含)

なし